子供一人一人のよさを生かす学習指導と評価の工夫
～ 説明的文章の指導を通して ～

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 21
Ⅱ　研究の仮説 …… 21
Ⅲ　研究の全体構想図 …… 22
Ⅳ　研究の内容 …… 23
　1 新しい学力観に立つ国語科の授業 …… 23
　　(1)自ら学ぶ力を育てる授業の工夫 …… 23
　　(2)個に応じた指導の工夫 …… 23
　　(3)子供の側に立つ授業展開のポイント …… 23
　　(4)新しい学力観に立つ授業改善の視点 …… 24
　2 子供一人一人のよさを生かす説明的文章の指導の工夫 …… 25
　　(1)子供の主体的な読みの活動を促す指導 …… 25
　　(2)説明的文章を読み取る力を育てる …… 26
　　(3)子供一人一人を生かす場の設定 …… 26
　　(4)教材研究を深める …… 26
　　(5)子供の側に立つ説明的文章の学習指導過程 …… 27
　3 学習指導に生きる評価の工夫 …… 28
　　(1)学習活動と評価の一体化 …… 28
　　(2)観点別学習状況評価の重視 …… 28
　　(3)指導過程における評価の工夫 …… 29
　　(4)自己評価と相互評価の充実 …… 29
　　(5)補助簿による評価 …… 30
Ⅴ　授業実践 …… 31
　1　単元名 …… 31
　2　単元について …… 31
　3　学級の実態 …… 32
　4　単元の目標 …… 33
　5　教材名 …… 33
　6　教材について …… 33
　7　教材研究 …… 33
　8　単元指導計画・評価計画 …… 35
　9　単元の学習指導展開 …… 35
　10　本時の指導 …… 36
　11　授業実践を終えて …… 38
　12　評価の実際 …… 38
　13　資料 …… 39
Ⅵ　研究の成果と今後の課題 …… 40

宜野湾市立　普天間小学校
佐　竹　綾　子

＜国語科＞

子供一人一人のよさを生かす学習指導と評価の工夫

～ 説明的文章の指導を通して ～

宜野湾市立普天間小学校　教諭　佐　竹　綾　子

I　テーマ設定の理由

21世紀を展望した教育は、子供たちがこれからの時代において、社会の変化に主体的に対応して生きていくために必要な資質や能力の育成を目指している。それは、自ら進んで考え、主体的に判断し、表現したり行動したりできる豊かで創造的な資質や能力であるといえる。このような教育を実現するためには、子供一人一人がよさや可能性を生かしながら、自ら考えたり判断したり表現したりするような学習活動を通して、自らの力によって先の資質や能力を獲得するようにすることであると考える。このようにして獲得された資質や能力は、その後の学習や生活における思考や表現活動、つまり生涯学習において、創造的に生きて働く力となるであろう。

このような観点から考えると、国語科の新しい学力観とは、子供のよさや可能性を生かすことを基調にし、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力の育成を重視する学力観であるととらえることができる。そして、その内容が基礎的・基本的な内容の中核をなすものであり、それは自己実現に生きて働く力となるものでもあると考える。

つまり、これからの国語科教育では、子供一人一人が進んで教材とかかわり、自ら考えたり、判断したり、表現したりする学習活動を通して、言葉による表現力や理解力を身に付けさせるようにする必要がある。特に、説明的文章の学習では、子供が教材の内容に興味をもって読み進める中で、文章の叙述に即して的確に要旨をとらえる力を培うことや、教材の理解を通して新しい知識・情報を得、自分なりのものの見方・考え方ができるようになる力をつけることが最大の目標であり、この力は自己教育力の重要な要素であると考える。そのためには、学習の過程で、子供一人一人の読み取りのよさに気付かせて自信をもたせたり、読み取りの不十分なところに気付かせ、より正確な読み取りを促すことができるような指導の工夫が必要である。また、既習事項の定着状況を個別に実態分析したり、学習指導と一体化した評価を工夫することによって、教師も子供も常に学習状況を把握し、毎時の学習では個に応じた指導を展開することが重要となる。

しかし、このような新しい学力観に立つ学習指導が展開されてきたか、という観点からこれまでの私の授業を振り返ってみると、決して肯定できない。どちらかといえば、教師主導型の学習指導で授業が展開されることが多かったように思われる。そのため、子供たちが主体的に学習する場面が減少してしまい、自分自身で学習することの楽しさや成就感を味わう機会が少なかったのではないだろうか、と反省している。評価にしても、学習過程に位置付けた観点別評価の工夫が足りず、結局は子供が指導内容をどの程度身に付けたかを測定するためのペーパーテストが中心で、個に応じた学習の手だてや場の設定が不十分であったように思われる。

このような反省をふまえて、子供一人一人の共感的な理解のもとに学習活動を支援したり、評価を一人一人の学習活動の支援に生かしたりして指導と評価の工夫に努めたい。それによって、説明的文章の読みを深める力を育て、子供一人一人のよさを生かす授業を創造したいと考え、本テーマを設定した。

II　研究の仮説

1　単元の指導展開において、指導目標や内容を具体化し、読みを深めることによって、基礎的・基本的事項の定着が図れるであろう。

2　子供の側に立った教材研究を進め、単元における学習形態や指導過程を工夫することによって意欲的に課題に取り組み、学習の仕方や学び方が育つであろう。

3　観点別学習状況の評価を基本とし、子供一人一人の学習状況を指導と一体化して評価することによって、毎時の学習指導に生かし、個に応じた指導ができるであろう。

III　研究の全体構想図

新しい学力観

学習指導要領

教育関係法規
- 日本国憲法
- 教育基本法
- 学校教育法
- 学校教育法施行規則

教育課程改善の基本方針
- 心豊かな人間の育成
- 基礎・基本の重視と個性尊重の推進
- 自己教育力の育成
- 文化の伝統の尊重と国際理解の推進

国語科の目標

国語を正確に理解し適切に表現する能力を育てるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

沖縄県教育主要施策

中頭・宜野湾市学校教育施策

第3学年の目標

(1) 表現する内容の要点が分かるように、区切りを考えて話したり、事柄ごとにまとまりのある簡単な構成の文章を書いたりすることができるようにするとともに、分かりやすく表現しようとする態度を育てる。

(2) 内容の要点を押さえながら話を聞いたり、内容の要点を正しく理解しながら文章を読んだりすることができるようにするとともに、いろいろな読み物を読もうとする態度を育てる。

表現の重点目標
- 書こうとする題材について必要な事柄をあつめること
- 事柄の順序を考えながら、語と語や文と文の続き方に注意して文章を書くこと

理解の重点目標
- 文章の叙述に即して内容を正しく読み取ろうとすること

普天間小学校教育目標

1. 自ら進んで学習し、深く考えて行動する子
2. 思いやりがあり、みんなと協力する子
3. 心身ともに健康で、気力のある子

研究テーマ

子供一人一人のよさを生かす学習指導と評価の工夫
～ 説明的文章の指導を通して ～

学級の子供の実態

説明文の学習では、事柄の順序や時間的な順序などに注意しながら文章の内容を読み取ることは大体できているが、中心文を見つけたり、段落相互のつながりを考えながら要点をまとめる学習は今回が初めてである。

目指す子供像

説明文のもつ内容的価値に触れたり、感動体験を積み重ねることによって、自分のものの見方、考え方、感じ方を豊かに広げ、深め自己を高めていく子

仮説①

単元の指導展開において、指導目標や内容を具体化し、読みを深めることによって、基礎的・基本的事項の定着が図れるであろう。

仮説②

子供の側に立った教材研究を進め、単元における学習形態や指導過程を工夫することによって意欲的に課題に取り組み、学習の仕方や学び方が育つであろう。

仮説③

観点別学習状況の評価を基本とし、子供一人一人の学習状況を指導と一体化して評価することによって、毎時の学習指導に生かし、個に応じた指導ができるであろう。

研究内容

新しい学力観に立つ国語科の授業

子供一人一人のよさを生かす説明的文章の指導の工夫

学習指導に生きる評価の工夫

学級の実態調査

教材研究・指導案作成

ワークシート作成
学習の手引き作成

評価補助簿の作成
自己評価カード作成

仮設の検証
（授業実践と考察）

研究のまとめ

成果と今後の課題

Ⅳ　研究内容

1　新しい学力観に立つ国語科の授業

(1)　自ら学ぶ力を育てる授業の工夫

国語科における「自ら学ぶ力を育てる指導」について、新しい学力観は「自ら学ぶ意欲の育成や思考力、表現力、行動力などの能力の育成を重視する」としている。国語科においても、「言語を通して主体的に表現し創造する力を育てるため、子供一人一人の興味・関心や特性などに応じて十分の配慮を行う」ことが強調され、授業改善の工夫が特筆されている。

そこで、「子供一人一人のよさを生かす」とは、子供たちが自らの力で読んだり、書いたり、話したり、聞いたりする主体的な学習活動であると考え、授業設計の段階で多様な作業学習、課題学習、一人学習などを取り入れることにした。その過程で、①何を分からせるのか、②何を考えさせるのか、③何をできるようにさせるのか、④どんな学習の仕方を身につけさせるかなど、子供の側に立った授業改善の工夫を意図的・計画的に図ることが研究のテーマにつながるのではないかと考えている。

以上のように、国語科の基礎的・基本的能力の定着、個に応じ個を生かす具体的な学習活動の工夫、主体的に学習できる「学び方」を身につけさせる工夫、図書資料の活用の仕方などを指導することによって、子供一人一人のよさが生かされ「自ら学ぶ力」は育つであろうと考えた。

(2)　個に応じた指導の工夫

小学校教育においては、人間の一生を通じての成長と発達の基礎を養い、国民として必要とされる基礎的・基本的な内容が、子供一人一人にしっかり身に付き、その後の学習や生活において生きて働くものとなってこそ意味があるものである。そのためには、実際の指導において個に応じた指導を工夫し、それらの内容が子供一人一人が持っている知識・思考・価値・技能・心情行動などの体系の中に組み込まれるようにすることが大切である。基礎的・基本的な内容をこのようなものとして身に付けさせることが基礎・基本を重視することになる。

個性を生かす教育を進めるに当たっては、基礎的・基本的な内容を子供一人一人が確実に身に付けることがことが大切である。そのためには個々の児童に着目して個に応じた指導を工夫する必要がある。

このように指導方法の工夫によって基礎的・基本的な内容が子供一人一人に自分のものとして働かせることができるように身に付くならば、その後の学習や生活に生かすことができるようになると考える。

また、豊かな個性の形成は内発的な意欲や主体的な学習の仕方を身に付けさせることも大切である。

個性を生かす教育は、基礎的・基本的な内容を身に付けさせる過程を通して、子供一人一人が個性を発揮しつつ主体的に生きることができる力を育てることを目指しているといえる。

(3)　子供の側に立つ授業展開のポイント

①　子供たち一人一人が新しい教材と出会う場面では、子供たちと話し合ったり、教師の思いや考えについて**子供たちの意見や考えを聞いたりすることが大切である。その中で、子供たちが自分の感じ方や考えのよさや可能性を発揮しながら、自分の**

言葉で自分のものの見方や考え方を深めたり、表現したりできるような国語科の授業の展開が必要である。

② 子供たち一人一人の興味や関心、これまで身に付けた学習内容や方法などを活用しながら主体的な学習活動が展開できるように、**個に応じて、指導目標や指導方法を幅広く、弾力的に設定する**ことが必要である。そのためには、一つの指導目標の実現のために、一つの指導方法に固執することなく、複数の指導方法を用意して、子供たち一人一人が自分で創意工夫する学習や工夫のよさを支援できる、弾力的な指導方法や指導過程を改善することが大切である。

③ 教科書の内容を教えればよいという一方的な考え方から脱皮する必要がある。具体的には、子供たちの立場に立って、どのような国語の力が獲得できるのか、そのためにはどのようにしたら教科書教材が活用できるのか、そのための補助教材は必要なのか、そのための発展教材はどのようなものを開発したらよいかなどを中心とする**国語科の教材研究の改善**が必要である。

④ 子供たち一人一人が既習の学習内容や方法などを生かしながらじっくり考えたり、それを自分の言葉でノートに書きまとめたりして発表できるような**学習場面や時間の確保**が大切である。また、そこで友達の感じ方や考え方のよさを自分の立場から理解し、さらに自分の考えを深められるようにすることも大切である。さらに、自分から進んで学習課題を発見し、その課題を解決したり発表したりできるような**学習形態の創意工夫**も必要である。そのためには、従来の指導内容中心の学習指導案から、子供たちが主体となる**学習指導案の創意工夫**が大切である。

⑤ 学習結果だけでなく、学習過程でも子供の側に立ち、子供たち一人一人の学習内容や方法などのよさを共感的に理解し、具体的に支援するような指導としての評価活動が必要である。

その際、評価の中心となる**「観点別学習状況評価」の四つの観点を活用しながら、単元の指導計画や本時の学習指導案としての評価の計画を位置付ける**ことが大切である。

(4) 新しい学力観に立つ授業改善の視点

① 子供の側に立って教材を工夫する。

② 子供一人一人が自分のよさや可能性を発揮することができるような単元や題材等の構成を工夫する。

③ 学習活動を始めるに当たって、子供一人一人が自分の学習したことや経験等とかかわらせて、そこに自分の課題や実現したい意図等を具体的に見つけたり、自分の課題として受けとめたりすることができるような工夫をする。

④ 学習活動の展開に当たっては、子供一人一人が関心や意欲、考え方等、さまざまなよさを生かすことができるようにすると共に、読書指導や図書館の活用など多様で弾力的な展開ができるように工夫する。

⑤ 学習活動の展開の過程にあっては、子供一人一人の考え方や感じ方、判断の仕方等、さまざまなよさについて共感し、子供一人一人がよりよくよさを発揮できるような支援をする。また、子供同士が互いのよさに気付き、認め合い、学び合えるようにすることにも留意する。

⑥ 単元（題材）や1時間の授業のまとめの段階においては、子供一人一人が自分の学習活動をじっくりとふり返ることができるようにするとともに、自らのよさや可能性を確かめられるような工夫をする。

⑦ 子供一人一人が、前の学習活動との関連や次の学習活動とのつながりに気付くようにするとともに、学習の過程において、自分の考えなどのよさを生かしていることや、それらが育っていることを実感し、自分に自身がもてるようにする。

⑧ 前項までのような、子供一人一人がよさや可能性を発揮するように、共感したり、支援したりする個に応じる授業をいっそう充実するために、複数の教師が協力し合って授業を計画したり、展開したりする。

2 子供一人一人のよさを生かす説明的文章の指導の工夫

(1) 子供の主体的な読みの活動を促す指導

説明的文章の指導は、説明されている事柄だけを読み取らせて終わってしまったり、書かれている内容よりそこで指導する技能的な側面だけを強調して指導したりしがちである。

説明的文章は、子供が自分の持っている知識、体験をベースに、未知の世界に足をふみ入れ、そこに見いだされる自然や社会、人間の真実を知るところに感動がある。こうした、知的感動を獲得させるためには、児童の主体的な読みの活動ができるよう学習指導を工夫する必要がある。

① 教材に対する興味・関心をもたせ、問題意識をもって読ませる

教材に対する知的な興味・関心は、学習の原動力である。そのために、子供が有している生活体験や知識を想起させたり、実物の写真や図鑑などを事前に準備しておくことによって、教材にスムーズに入ることができよう。

また、「何が、どのように説明されているか」を常に意識させて読み進めることが大切である。そのために、一読後の感想を基に、「もっと詳しく読みたい。この部分がわからない」などを読みの課題に設定して、毎時間、一人一人が問題意識をもって学習させることが大切である。

② 叙述に即して、正確に読ませる

ア 客観的表現に依拠して、事実を正確にとらえさせる。

そのため、物の名前や、数字などをしっかりと読ませる必要がある。

イ 記述のまとまりをつかませる

何について、どのようなまとまりで書かれ、それらのまとまりがどのように結びついて説明されているかをとらえさせる。特に、要点と細部の関係を押さえながら、要点をまとめる。つまり、各段落の意味内容を読み取らせ、段落の要点をまとめることによって、文章全体の段落ごとのつながりを考えさせる。

③ 生き生きと学習できる学習法の工夫

サイドライン・小見出しつけ・抜き書き・絵をかく・構造図に表す・表に整理する・箇条書きにするなど、教材に即した、しかも、そこで養うべき技能能力が的確に身に付く学習活動を設定する。

作業をともなう学習活動を導入するためには、

ア 子供にとって、興味・関心のもてる活動であること
イ 易しいものから、難しいものへと段階をふむこと
ウ フィードバック、アタック(補充、深化)の方法の準備があること
エ 他の活動、教科との関連を図ること
オ この活動を通して、どんな技能、能力を養うのか明確にすること
カ 教材の内容にあった精選された活動であることを常に考えて設定する
キ ワークシートやノートの取り方についても教材、子供をふまえた工夫をする

以上、中学年における説明的文章指導上の留意点だが、教材の特質をとらえた指導、どのような読解技能・能力を身に付けさせるかを明らかにした指導、子供の主体的な読みの活動を促す指導を念頭において説明文を指導していくことが重要である。

(2) 説明的文章を読み取る力を育てる

① 書く活動を取り入れる

本時の課題にそった読み取りをしていく上で、読み取ったことを書くという活動をさせる。児童の活動が把握でき、読み取った内容の評価もできる。1年生から3年生まででは、書くという活動も段階がある。個に応じた書かせ方も大切である。

② 本文に対しての自分の考えをもたせる

読み取ったことに対して、「自分の経験や体験と比べる」「自分だったらどうだろうと置き換える」「自分の考えを書く」などの活動をすることにより、叙述に即した読みだけでなく、さらに一歩深まった読みができる。そのことが子供一人一人にとって主体的な学習となり、また、楽しく学習できることにもつながる。

③ グループでの話し合いを生かす

自分の読み取ったことを友達と話し合うことで、さらに読み取りが深まり、また、自分の考えに自信をもつことができる。友達の考えを参考に、自分の考えを修正することもでき、進んで発表する意欲化へつながる。3年生ぐらいになると、グループの誰かが司会者になって、話し合いを行うこともまとめやすくてよい。

グループで話し合ったことを代表が発表し、それに付け加えたりする方法や、グループでの話し合いを生かし、個々が発表する方法が考えられる。

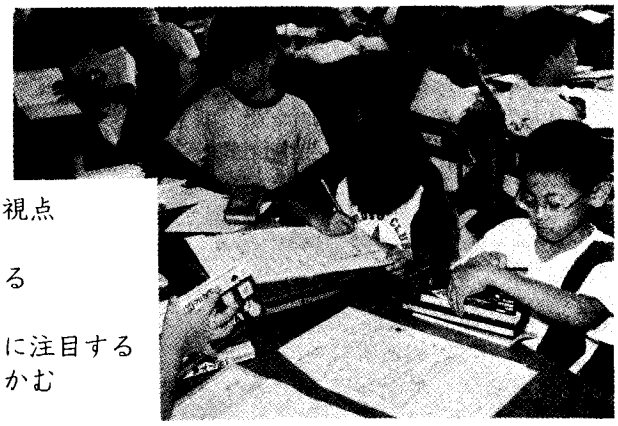
④ 補助資料を生かす

ア　写真や挿し絵の活用
イ　前時の学習のまとめのカードや感想など
ウ　図鑑など、関連した図書等から補説する

(3) 子供一人一人を生かす場の設定

子供にはそれぞれの個性があり、特徴がある。学習においても、思考の仕方には個人によって異なるものがあり、得意なもの不得意なものもある。授業づくりにおいては、こうした個人の特徴や持味を最大限に発揮できる場を設定していく必要がある。また、とらえたり評価したりしたことをどのような場で生かすのかを考え、計画的に実践していかなければならない。

① 多様な学習活動の工夫
② 多様な学習形態の工夫
③ 問題解決的な学習の実践
④ 多様な教材・教具の開発



(4) 教材研究を深める

◆説明的文章の教材研究における視点

① 文章構成を明らかにする
② 文と文との関係を明らかにする
③ 接続語の役割に注意する
④ 指示語の指し示している範囲に注目する
⑤ 文末表現から筆者の意図をつかむ
⑥ 重要語句に注意する
⑦ 絵、図表、写真、グラフに注目する

※ これらの視点をふまえ教材研究に望めば、子供たちがあらかじめ学習していく時の一人学びの手引きともなる。それらをワークシートに取り入れ、学習の方法を定着させるようにすることが重要となる。。

(5) 子供の側に立つ説明的文章の学習指導過程

学習指導過程においては、様々な方法があると思うが、一つ一つの単元を指導するに当たり、「説明文で、～を学習していくのである」という子供の側に立った指導目標の達成を目指していきたいものである。子供の思考の筋道に即して、学習を発展させていくというのが、今、説明的文章の指導で求められていることの一つであると言われている。また、学習の順序なり方法をわからせて授業に望むということも、主体化につながることであると考える。

過程	学習指導内容
導入	**意欲的に教材に向かう** ・単元名や題名から内容を想像する。 ・内容を考えながら全文を読み通す。 ・初めて分かったこと、面白かったこと、疑問に思ったことを捉える。 ・読み取り方の予想を簡単に見当付ける。 ・既習の学習内容を、本時の学習に生かすようにする。
	問題意識をもつ ・初発の感想(驚いたこと、不思議なこと、共感すること、興味のあること、学びたいこと)をもつ。書く。 ・文章の要旨を予想する。
	課題の焦点化を図り、解決の見通しをもつ ・自分（個）の課題を見つけ、全体を比較する。 ・部分的な課題を設定し、学習計画と方法について考える。
展開	**課題解決に立ち向かう** ・課題について、着目すべき言葉、文、段落を予想し、解決の方法を知る。 ・課題に対する考えをもつ。書く （部分音読、視写、書き込み、ノート、ワークシート、カード、サイドライン、絵図、文図） ・重要語句に気をつけ、全体を関連付けながら読む。 ・友達の考えを比較し、新しい考えを見つける。
	要旨をまとめる ・全文に立ち返り、書き手が何を言おうとしているのかをつかむ。 ・書き手のものの見方や考え方を自分に返してまとめる。
終末	**読み取ったことを身に付ける** ・分かったことを確かめ、感想をまとめる。 ・読み取った内容や表現を確かめ、音読する。
	練習し、評価する ・文字・語句・短作文の練習をする。 ・学習してできたこと、できなかったことをはっきりとさせ、次の学習につなぐ。
	学習したことを生かそう ・関連する図書をどんどん読む。 ・深めたいことや発展させたいことを見つけて、新しい課題をもつ。

3　学習指導に生きる評価の工夫

(1)　学習活動と評価の一体化

新しい学力観において、自ら学ぶ意欲を高め主体的な学習の仕方を身に付けると共に、個に応じた学習指導の充実を図ることが重視された。このような指導を行う上で評価の在り方やその工夫が改めて問われてきた。学習指導の改善に生かす評価という視点を一層重視すると共に、そのことを通して、子供の学習意欲を喚起することが大切である。

学習指導における評価においては、指導の成果と供に指導の過程における子供の学習に対する努力や意欲などを評価し、子供の学習意欲の向上に生かすようにすることが大切であると言われている。また、個に応じた指導を進める上で、学習過程における評価は欠かせない要素である。さらに、学習者の主体的な学習を重視する意味から、子供自身の自己評価や友達との交流学習の中での相互評価を適切な方法で行うことが大切である。ともすると評価は学習活動が終わった1時間の最後や、単元の学習の終末段階に改めて評価要旨やテスト問題等が配られて行われることが多いが、そうではなくて、学習指導の過程において学習活動と評価の一体化を図ることが求められている。このように、子供自身が自分の思いやよさ、可能性を発揮し、進んで学習に取り組み、感じたり考えたりすることによって分かり学ぶ楽しさや成就感を味わうことを支援する評価を実施しなければならない。教師の期待や願いは、子供一人一人が自分のよさや可能性を具体的に発揮することへの期待や願いであり、共感的理解を目指す愛情の行為でもある。こうした姿勢から、自分の言葉で進んで表現したり、思考したりすることを支えようという温かい思いが生まれる。また、子供一人一人の立ちどまりや戸惑いに対しては、関心や意欲を損なわないように、既習の学習内容を取り上げたり、支援したりするなどの豊かな指導の創意工夫も生まれてこよう。こうした行為は、指導であると共に、子供一人一人に応じた温かい評価活動が成立していることでもある。**一人一人の学習指導での過程や成果等を的確に把握し、それらを子供一人一人の学習活動の支援に生かし、子供たち一人一人の自己実現に向かうような学習活動と評価の一体化を考え工夫していなかなければならない。**

(2)　観点別学習状況評価の重視

これからの評価は、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの能力の育成を基本とする学力観に立たなければならない。こうした学力観に立った授業を展開していく過程において、子供一人一人のよさや可能性などを積極的に見い出し、それを一層伸ばすということにねらいをおくようにしなければならない。

こうした考え方を基盤としながらも、子供一人一人の学習の状況を多面的にとらえるようにすることが重視される。つまり、**観点別学習状況評価の4つの観点は、新学習指導要領に示されている各教科の目標に照らしてその実現の状況について、子供一人一人の学力を多面的に評価するための観点である**と認識する必要がある。また、これらの観点を学習の展開過程に即して固定的にとらえるのではなく、**子供一人一人の学力を観点別に見ることによって、その子の個性的な側面を評価するとともに、その評価に即して個に応じた指導を継続する**という面を大切にしなければならない。

例えば、ある子供が思考力は極めて高いものが見られるが、人前で話したり、文章にまとめたりする表現力が劣るという傾向が見られたとする。こうしてその子なりの特性が見られたならば、この子には、多くの学習の場で自己表現の機会を多くもつように指導することが大切となる。また、ある子供は表現力は高いものをもっているが、思考力や観察力、資料活用能力などに弱さが見られたとする。こうした子には、自分なりの見方や考え方を高めたり観察する機会を多く作ったりするようにする。こうして、子供一人一人の長所や得意なことを伸ばし、短所や苦手とすることを補うように支援する。これが評価を生かした指導の工夫であり、学習指導と評価の一体化を図るものとなる。

(3) 指導過程における評価の工夫

① **診断的な評価**（動機づけ・実態把握）－導入の段階での評価

実際の指導に先立って、単元の学習に入る前に習得すべき知識・技能についてどの程度定着しているかを調べるために診断的評価できるような診断テストを作成したり、進級テストなどを利用して実施する。その評価の結果から子供の能力の現状を把握し、個に応じた最適の学習方法を準備するための指導に生かしたい。

診断的評価の機能としては、次のようなことがあげられる。

- ある単元の目標を獲得するために必要な能力や技能を子供が身に付けているか否かを知る。
- ある単元の目標を子供が既に習得しているか否かを確認する。
- 興味、人格、適性などの教授法と関連のある特徴について子供を把握する。

手だて	**アンケート　自作診断テスト 既習単元の評価補助簿**　等

② **形成的な評価**－学習中の評価

学習指導過程の中で子供のものの見方・考え方・態度・能力など、その変容を捉えることは重要なことである。また、学習の達成状況や、子供のつまずきの状況などを把握することで、次の具体的な手だてが生まれる。子供の実態をふまえ各単位時間において評価項目の重点化を図り、子供の実態に応じて臨機応変に対応し、子供の学習を支援することに役立てるようにしたい。

形成的評価の機能としては次のようなことがあげられる。

学習上のつまずきの原因を明らかにし、子供の学習ペースの調整を行い、学習内容が未習得の場合は、それを習得の方向へ導くための矯正的学習の計画を立てる。教師にとっては指導方法の効果に関するフィードバックを行う。形成的評価を行うためには、学習内容と学習技術に関して当面達成されるべき目標を細分化し、それぞれに対応した形成的評価を実施する必要がある。

手だて	**ワークシート ノート 進級テスト 文章構成図 感想文 評価補助簿**　等

③ **総括的な評価**－まとめの段階での評価

単元、学期、課程の終わりに実施し、到達目標に照らして子供の学習達成状況を評価することによって、学習指導の効果を確認し課題を見つけ、今後の学習指導に生かせるように工夫する。さらに、子供の成績の評定、学習結果のフィードバック、技能や能力の認定、次の学習の方法等の選択の資料などに活用したい。

手だて	**感想文　新聞　紙芝居　終末テスト　単元テスト**　等

(4) 自己評価と相互評価の充実

① **学ぶ意欲を高める自己評価**

意欲は、子供自身が学んでいることに対する目標や意味をしっかりつかんでいることが前提になければならない。何を、何のために、どのように学習するのかを子供自身がつかむことによって、より意欲的な学習が可能になると思われる。

◆自己評価のポイント

- 学習が、その子供にとって意味のあるものであったか否か、またその目標が子供にとって妥当であったかどうかを問うことが必要である。
- 学習を振り返って、他の情報と比較したり検討したりして、自分にとってよりよい情報を選択することが必要である。
- 自分で評価したことが望ましいと、次の学習への動機が強められる。そうでない場合、どのように改善していくのかを考え、自己を高めるための意欲や態度を強めることが必要である。

② **共に高め合う相互評価**

授業においては、教師や友達からさまざまな情報（学習活動も含めて）が与えられる。ここでは、とかく過大になったり過小になりがちな自己評価に、他者からの情報を取り入れて、多面的視野から自分を見つめ直していくことが求められる。

相互評価はまた、教師が子供のよさを認めるのと同時に、子供同士が互いに学び合い、そのよさを認めながらも自分の学習に生かしていこうとする主体的な姿勢を培うのにも大変有効である。そのために、一時間の指導過程に相互評価の場面を意欲的に取り上げることが必要である。

③ **共感的理解を日常的に**

子供の認知や感情面を、ありのままに受けとめるという接し方が、内発的な意欲を高めるのに重要な意味をもつ。指導の中にこの共感的な理解を大切にすることによって、子供の内面をよく知ることが可能となる。そのことによって、子供と教師、子供相互に豊かな交流が生まれるだろう。そうした接し方が、指導であり、評価であるという点からも、日常的なふれあいを重視していきたいものである。

(5) 補助簿による評価

子供のよさで評価することは、長所を大切にして、いかに伸ばしていくかという観点で評価することである。このことは、自分の短所にブレーキをかけることにもつながるのである。このような評価観に立って指導要録についても一人一人の子供を大切にした評価をしてきているが、特に関心・意欲・態度を中心にして日々の授業の評価をどのようにするとよいかについては、現在も大きな課題として実践しているところである。一時間一時間の評価を補助簿のようなもので評価したり、座席表補助簿でチェックするようにして評価したり、単元レベルで一人一人を見ていくといった方法がとられている。それぞれは、評価の方法として具体的で単元（教材）を通して評価することとし、従来のようにペーパーテストを主に評価したり、教師の経験（教師の勘）で評価をすることがないようにする必要がある。

評価するときは評価項目を単元のねらいに即して作成して、一時間の学習の取り組みをきめ細かくできるようにしたり、教師にとっては、評価項目についてチェックすることが主たる目的になってしまうことのないように配慮することが大切である。

◆ **補助簿による評価の視点**

教師は、子供の活動を十分に評価し、ねらいと指導と評価の一体的な取り組みよって子供のよさを引き出し、可能性を伸ばしていくことが大切である。補助簿の作成と評価には、次のような観点で取り組みたい。

① 評価項目が多すぎないようにする。
② 単元の目標とのかかわりを十分にもたせる。
③ 「できた、できない」「読めた、読めない」といった断片的な評価にならないようにする。
④ 単元ごとのテストのウェイトを考え、目標の細分化によって、点数主義にならないようにする。
⑤ 一時間ですべての児童を評価することは可能ではないので、単元を通して必ず評価できるような方法をとる。
⑥ 指名の仕方などにも評価のあり方と共に意図的にする。
⑦ 発表なども一人一人ができる方法を十分に考慮して評価する。
⑧ 子供にどのようなことで評価しているのか理解させる。
⑨ 自己評価・相互評価の方法を適切にできるように自己評価力をつける。
⑩ 日々の積み上げの大切さについても理解させる。

各教材すべての評価基準のもとに評価項目を作成することが望ましいが、単元のなかで重点的に扱うことを整理して、学年での評価の方法、学校としての担任の評価の方法が違うことのないようにしたい。教育課程が各学校の創意と工夫ある中で策定されると共に、評価についても学校の主体性が問われていることを十分に認識して子供の側に立ったものにしていくことが大切である。

Ⅴ　授業実践

国語科学習指導案

平成８年６月25日(火)３校時
普天間小学校　３年２組34人
授　業　者　佐　竹　綾　子

１　単元名　　まとまりを考えて（説明文）

２　単元について

子供たちの思いや願いと本単元の意図

行動範囲が広がり、何事に対しても興味・関心をもつことができるのが、３年生の特徴である。特に、自然の事象、その中でも動物や植物に関することがらに対しては子供たちの知的好奇心が一段と高まる。教室では、ザリガニやグッピー、かいこの飼育に取り組んでいるところであり、毎朝登校してくると、えさをあげたり水替えをするなど、喜んで世話をする姿が見られる。また、ザリガニやかいこの脱皮を見て、成長の変化に不思議さを感じ、質問に来る子や図書室で本を借りて調べようとする子がでてきた。本単元で取り上げられているヤドカリやありは、子供たちにとって身近で親しみのもてる生き物である。したがって、それらの生態や不思議な習性は、子供たちの知的好奇心を満足させるだけでなく、自然界の素晴らしさに目を向けるきっかけともなろう。すなわち、子供たちはこの教材を通して、自然に対する新鮮な驚きや感動を体験するとともに、さらに興味・関心を深めることができる。

「ヤドカリのすみかえ」は、「ヤドカリは、体の成長に合わせて、どうやってすみかえをするのか。」という疑問に対して、筆者が観察を通してその様子を明らかにしたという内容である。また、「ありの行列」は、「ありはものがよく見えないのに、なぜ、ありの行列ができるのか。」という疑問に対して、アメリカの学者ウイルソンが試みた実験－観察－考察－研究－結論という過程を通して、行列ができるわけを知るという内容である。ここでの学習では、文章を形式段落に分け、その形式段落ごとの要点を把握することや、「観察」「わけ」「研究」といった言葉を手がかりに、文章の読み取りを深めようとするものである。要点のみを追っていくと、かえって文章の全体像を見失ってしまうことがある。文章を注意深く読み深めることで、一つ一つの形式段落のつながりや全体の構成も理解させたい。また、「観察」の内容を確かめたり、「わけ」の書いてある部分を探したりすることで、段落どうしの関係をつかむことを意図している。さらに、本単元「ありの行列」では、ウイルソンがなぜありの体の仕組みを細かく「研究」したのかを考えることで、この文章全体の〈「疑問」から出発して「観察」し、「仮説」を立てる。その仮説を実証するために体の仕組みを「研究」した〉という構造を理解することができるであろう。

このような学習を通して、表現方法や構成などに注意し、要点を正しく理解して説明文を読み取る力、情報の集め方・選び方・生かし方・まとめ方などを育てることを意図して設定したものである。

(2)単元の構成……（省略）

(3)指導について……（省略）

(4)子供のよさを生かし主体的な学習活動にするために

①問題意識をもって読ませる

子供たち自身が、自分の問題意識をもって教材を読み進めることができるように、「どうやってすみかえるのでしょう」「なぜ、ありの行列ができるのでしょうか」といったそれぞれの教材の問題提示文に着目させ、文章全体を読み通す視点を明確にする。また、子供の初発の感想を基に、「もっと詳しく読みたい。この部分がわからない」など個人の読みの課題を設定して、毎時間、一人一人が問題意識をもって学習できるようにする。

②作業をともなう学習活動の設定

読みの過程では、子供一人一人の読みを大事にし、読む・書く・話し合うという一連の学習活動をもたせ、課題を解決する学習に作業を取り入れる。内容を正しく読み取るためには、音読やワークシート、サイドライン法や動作化、絵画化など、作業学習を通して、効果的で楽しく興味をもたせた学習活動を展開する。また、ワークシートの内容を工夫して読み取った内容を絵で表したり、子供一人一人が自分のありのペープサートを作り、それを使って実際の動きを表したりすることによって、教材の内容が実感できるようにするとともに、一単位ごとのワークシートを基に「新聞作り」をしたり、学習を関連させることができるようにする。

③「大事な文」を必要とする場の設定

本単元は、「要点の把握」について最初の学習になる。そのため「要点」とは何か、ということについて理解するようにすると共に、なぜ、「要点」を抽出することが大切なのか、ということについても体験的に理解させたい。そのためには、新聞作りや報告会など、要点を抽出せざるをえない学習を組織し展開する。子供がまだ慣れていない段階ならば、教師がいくつかの観点を問いとして配列したワークシートを用意する。

④　文章構成を身に付ける場の設定

本単元の場合、要点をまとめる観点としては、①だれが、どんな疑問や考えをもったか、②どのようにして観察・実験・研究調査などをしたのか、③その結果、分かったことは何か、などに着目していくことが挙げられる。この、①－②－③という順序は、理科の実験・観察記録の形式と変わらない。そこで実際の理科の授業と関連させて、本単元の文章構成を利用しつつ記録文を書くようにしたならば、文章構成の基本を理解するとともに、書く段落における「大事なこと」ということについての理解も可能になるであろう。

⑤　学習したことを生かして（発展）

本単元の学習に続けて、自分たちの身近な小動物の行動について不思議に思うことを挙げあって、図書館の書籍で調べ、分かったことを作文や手紙、新聞にまとめたり、発表し合う学習を行う。しかし、小動物の様々な行動に普段からなじんでいない子供にとっては、自ら問を立てるのは困難であろう。そこで、図書館の関連書籍にあたらせて、科学者は動物のどのような行動に不思議さを発見したのか、ということに絞って調べ読みをするようにしたい。それは前述における①に相当し、広義の読書指導の基礎ともいえるものである。

3　学級の実態

(1)全体的特徴……（省略）

(2)説明文に関する個別の実態分析

◎既習学習の観点別評価補助簿　（説明文に関する個別の実態分析）

《第２学年　説明文教材》

・　たんぽぽのちえ　・　あつまれ、楽器

・「ことば」をおぼえたチンパンジー

（進級テスト　30・29・21・20・８・７級を実施して）

観点		基礎的・基本的事項	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
意欲・態度	国語への関心・	進んで発表をする。	A	A	B	B	A	A	B	B	A	B	B	B	B	B	B
		進んで文章を書く。（読書カード・日記）	A	A	A	A	A	A	B	B	A	B	B	A	B	B	B
		進んで本読みをする。（本読みカード）	A	A	A	B	A	A	B	B	A	B	B	B	B	B	B
		やさしい読み物を進んで読もうとする。	B	B	A	A	A	A	B	B	B	B	B	B	B	A	B
表現		ア 相手の話の内容を受けて話したり、自分から進んで話したりすること。															
		イ 事柄の順序を考え整理し話すこと。															
		ウ 書こうとする題材について、必要な事柄を集めること。															
		エ 見聞したこと、経験したことなどについて順序を整理して文章を書くこと。															
		オ 事柄の順序を考えながら、語と語や文と文の続き方に注意して文章を書くこと。															
		キ 正しく視写したり、聴写したりすること。															
理解		ア 話を最後まで聞き、内容を正しく聞き取ること。															
		イ 話の順序を考えながら、内容を正しく聞き取ること。															
		エ 時間的な順序、場面の移り変わり、事柄の順序などを考えながら内容を読み取ること。	A	B	A	A	A	A	A	A	B	C	A	A	C	B	B
		オ 文章の叙述に即して内容を正しく読み取ろうとすること。	A	B	B	A	A	A	B	B	A	B	A	A	A	B	C
		カ 人物の気持ちや場面の様子を想像しながら読むこと。															
言語	イ	(ア)片仮名を読み、また、書くとともに、文や文章の中で片仮名の使い方を理解すること。	A	A	A	A	A	B	A	A	B	A	A	A	A	A	A
		(イ)漢字を正しく読み・書きすること。	A	A	A	A	A	B	B	A	C	B	A	A	B	A	C
	オ	(ア)文の中における主語と述語との関係及び修飾と被修飾との関係に注意すること。	B	B	A	A	B	A	C	C	A	A	A	A	B	A	C
		(イ)文や文章の中における指示語や接続語の役割と使い方に気付くこと。	B	A	B	A	A	B	B	B	B	C	B	B	B	C	C

（A）十分満足できる
（B）おおむね満足できる
（C）努力を要する

以下同様に個別評価をする……（省略）

▲進級テスト結果　30・29級（平均61.7点）　21・20級（平均76.0点）　8・7級（平均78.5点）

4　単元の目標

(1)　本単元の目標

◎身近な小さな生き物に興味をもち、楽しく文章を読みながら要点を理解し、叙述に即して内容を正しく読み取ることができる。

○必要な内容を整理して書くことができる。

○文章の中の言葉の意味や使い方に気をつけたり、主語、述語の関係、文末表現のはたらきなどに注意することができる。

(2)　観点別評価目標

国語への関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語についての知識・理解・技能
身近な生き物について知っていることを進んで話そうとする。 ありの行列ができるわけについて、書かれている事柄に興味・関心をもち、読み進めようとする。 学習の手引きをもとに進んで要点をまとめようとする。 生き物に関する本に興味をもち、いろいろな本を読み、進んで新聞にまとめようとする。	文章に書く必要のある事柄を選び、整理してから書くことができる。 事柄ごとに区切りや中心を考えてから文章を書くことができる。 身近な生活における話題や題材について、自分の考えをまとめ、要点や段落を考えて話をしたり、文章を書いたりすることができる。	文章の要点を正しく理解しながら、内容を読み取ることができる。 ウイルソンの実験・観察や研究について、文章の叙述に即して内容を正しく読み取ることができる。 話や文章の構成に即して、自分の立場から話の要点をおさえ文章の内容の要点を落とさない読むことができる。 段落と段落のつながりを理解することができる。 要点のまとめ方がわかり説明文の学習の仕方を理解することができる。	新出漢字や読みかえの漢字の読み書きができる。 声の大きさや速さに気を付けて音読することができる。 主語と述語との関係及び修飾と被修飾との関係を理解することができる。 指示語や接続後の役割と使い方が分かる。 文末表現の働きが分かる。

5　教　材　名　　「ありの行列」　(光村図書３年－上)

6　教材について

本教材は、ありの行列ができるわけを、筆者が、アメリカの学者、ウイルソンの研究成果をもとにしたものである。子供にとって、ありは比較的身近な生き物であるが、ありの行列がなぜできるのかと疑問をもっている者は少ない。見過ごしてしまいがちな現象に、改めて興味・関心を抱き、科学的な物の見方、考え方に共感しながら、読み進めていくことのできる教材である。全文は、十の形式段落に分かれ、冒頭で「ありは、ものがよいく見えないのになぜ、ありの行列ができるのか。」という問題を提起し、学者ウイルソンが、観察した結果から仮説を立て、その仮説を実証するために研究をし、最終段階⑨⑩で結論を出すという尾括型の文章構成になっている。順序を表す言葉や、指示語、接続語が適切に使われ、要点をとらえ、論理の筋道をたどるのに大切な働きをしており、語句を手がかりに事柄のつながりや、段落ごとの要点をとらえていく力をつけていくのに適した教材であると思われる。

7　教材研究

(1)　要旨を捉えるための学習課題

ありはよくものが見えないのに、なぜ行列ができるのか。

↓

ウイルソンはじめの実験・観察から、分かったことは何か。

↓

ウイルソン次の実験・観察から、分かったことは何か。

↓

ウイルソン研究から、分かったことは何か。

↓

ありの行列ができるのは、どうしてか。

↓

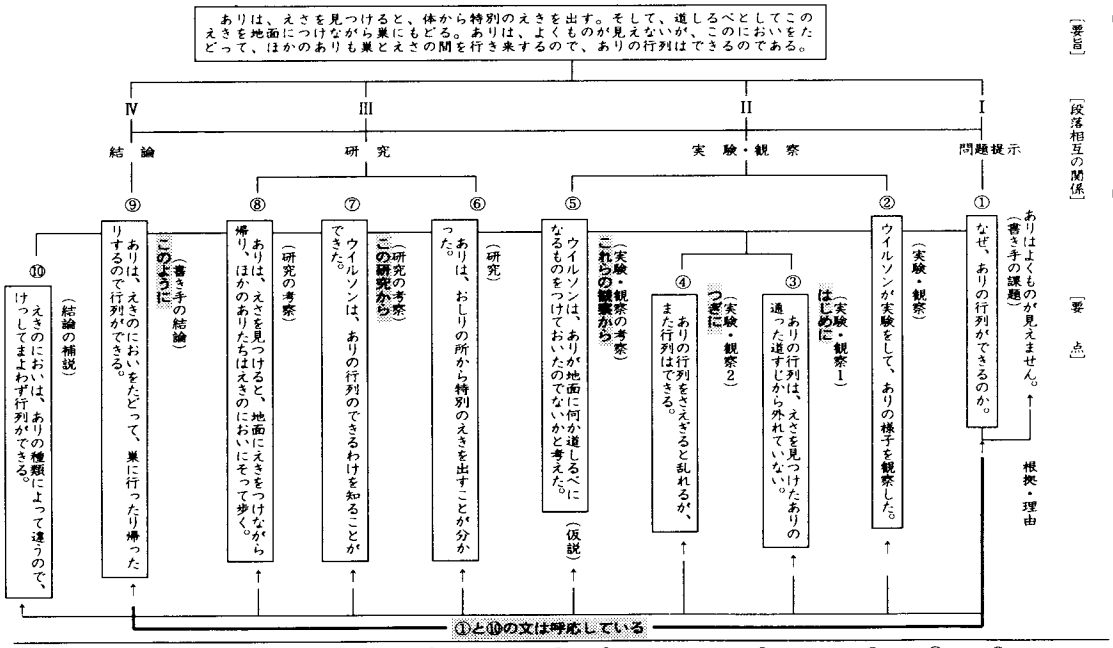
要　旨

ありは、えさを見つけると、体からとくべつのえきを出す。そして、道しるべとしてこのえきを地面につけながら巣にもどる。ありは、よくものが見えないが、このにおいをたどって、ほかのありも巣とえさの間を行き来するので、ありの行列はできるのである。

(2) 書き手の論理展開

過程	問題提示	実験・観察				研究・考察			結論	
	ありの行列ができるわけ	ウイルソンの実験・観察から分かったこと				ウイルソンの研究から分かったこと				
段落	話題	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
書き手の論理展開（要点）	① ・なぜ、ありの行列ができるのか。	・ウイルソンは、実験をしてありの様子をかんさつした。	・行列は、はじめのありが巣に帰るときに通った道すじから外れていない。	・ありの行列を、大きな石でさえぎっても、また行列ができ、道すじはかわらない。	・ウイルソンは、ありが地面に何か道しるべになる物をつけておいたのではないか、と考えた。	・ありは、おしりの所から、とくべつのえきを出すことが分かった。	・ウイルソンは、ありの行列のできるわけをしることができた。	・ありは、えさを見つけると、道しるべとして、地面にえきをつけながら帰る。	・ありは、えきのにおいをたどってえさの所へ行ったり、巣に帰ったりするので行列ができる。	・えきのにおいは、ありのしゅるいによってちがうので、けっしてまようことなく行列ができる。
重要語句	・あり ・行列 ・なぜ…でしょうか。	・ウイルソン ・じっけん ・かんさつ	・ひとつまみ ・道すじ ・つぎつぎと ・ふしぎなことに…	・行く手 ・さえぎって ・みだれる ・ちりぢり ・かえるときも… ・だんだんに ・道すじ ・目的地	・道しるべ	・体の仕組み ・研究 ・とくべつのえき ・におい ・じょうはつしやすい	・行列のできるわけ	・道しるべ ・そって ・つけながら	・えきのにおい ・たどって ・……たり、……たり ・……ので、……	・えきのにおい ・ありのしゅるい ・……も ・けっして……ない
○指示語 ●接続語 ・文末表現	○それなのに ・……でしょうか。	○この人 ・……しました。	●はじめに ●すばらくすると ●やがて ●すると ●そして ・……しました。 ・……のです。	●つぎに ●そして ○そのうちに ●また	○これら ・……と考えました。	●そこで ●すると ○それは ・……が分かりました。	○この ・……できました。	○この ○そのため ・……のです。	○このように ・……わけです。	○この ●それで ・……分かりました。 ・……のです。
知的感動	・ありはものがよく見えないのに、なぜ、行列を作ることができるのか不思議だな。	・きちんと実験・観察をして、ありの行列のできるわけを調べた人がいるなんてすごい。	・ありの行列に大きな石をおいて道すじをさえぎっても、またちゃんと行列ができるなんて、ありはいったいどんな秘密をもっているのか早くなぞを解きたいな。	・もしかして、ありはただ歩いているんじゃなくて、地面に何か道しるべをつけているのかもしれないぞ。		・ありの体の仕組みを研究したら、おしりの所から、においのある蒸発しやすい特別の液を出していることがわかった。ウイルソンの大発見だ。	・ありは、地面に液をつけながら歩き、そのにおいにそって歩くから行列ができるんだ。すごい。		・やっと、ありの行列ができるなどが解けたぞ。うれしいな。 ・ありの種類によって液のにおいが違うから、まいごになることがないんだ。自然は不思議にうまくできているな。	

(3) 『ありの行列』の文章構成図



［言語事項］

三年『ありの行列』

①3文
・ありは目がよく見えないのに、なぜ行列ができるのか。

②6文
・このような実験・観察を…
・この人

③7・8・11文
・はじめに
・すると
・やがて
・そして

④14文
・次に
・道筋

15文
・さえぎる
・すると
・みだれる
・ちりぢり

131210文
・その行列

1817文
・そして
・そのうちに
・また

1920文
・目的地
・道筋

⑤2321文
・これらの観察から
～と考えた。

⑥24文
・そこで、
～を研究してみた
・体の仕組み
・特別のえき

2625文
・におい
・それ

⑦27文
・蒸発しやすい
・このわけ
～を知ることができた。

⑧28文
・えさ
・道しるべ
・地面

29文
・えき
～しながら
・そのにおい
・かぐ

30文
・そって
・そして
～もです。

3231文
・そのため
・このように
～たり～たり
～というわけです。

⑨3233文
・このように
・ありの種類
～も分かりました。

⑩34文
・それで
・決して～ない

8　単元指導計画・評価計画……（省略）

9　単元の学習指導展開　　（全１４時間）

過程	時	学習目標	習活動・学習内容	基礎・基本	師の支援・留意点・個に応じた指導	重点評価
つかむ	第一次－1時	ヤドカリやありについて話し合ったり単元全体の学習のめあてを知ることによって、教材に対して興味・関心をもつ。	・小さな生き物の名前や知っていることについて話し合う。 ・ヤドカリやありのことについて知っていることを話し合う。 ・題名から考えられることを話し合う。 ・単元の学習計画について知る。 ・教材を読んで分かったことや自分で調べた小さな生き物について、新聞にまとめることを知る。	○めあてをつかみ、学習への意欲をもつ。	・単元について関心をもたせるために、日頃から朝の会などで小さな生き物についての話をしたり、教室に資料を掲示したりして関心を高めておく。 (※前提テストは朝の活動の時間に実施する。) ・題名を膨らませて読むことは、書かれている内容を自分なりに予想してみることなど、教材を意欲的に読ませることにつながるので大切に扱う。 ・単元の導入の時間になるので、子供の発表態度などを机間指導しながら観察し、評価する。 (※休み時間などを利用して、小さな虫やありの行列などの「校内生き物探険」をする。)	【関・意・態】 目的をもって教材を読んでいこうという意欲をもつことができる。
深める	第二次－1時	「ヤドカリのすみかえ」の全文を読んであらましを読み取ることができる。	・黙読し、初めて知ったこと、疑問に思ったこと、驚いたことなどをワークシートに感想を書いて発表する。 ・感想の内容を整理しながら、文章のあらましを確かめる。 ・何が書いてあったのか、まとめたことをもとに確認する。	○自分なりの感想をもって発表できる。	・同じ内容の感想であっても、できるだけ多くの子供に発表させ、学習への参加意欲を高める。 ・感想は「分かったこと」「知りたいこと」にまず分けさせ、文章の順序に従って並べ替えるようにさせ、疑問点は「知りたいこと」とする。 ・知りたいことで、子供ですぐ解決できるもの、教師の補説で解決できるものについては整理が終わった段階で解決する。	【理解の能力】 書かれている順序に従って大体の内容を理解することができる。
	第二次－2時	「ヤドカリのすみかえ」のまとまりごとに要点をまとめることができる。	・音読する。 ・欄外を読んで一字下がりの意味について知るとともに、この「ヤドカリのすみかえ」が六つのまとまりから成っていることを実際に番号をつけて確認する。 ・「すみかえ」ということを考えながら①のまとまりの中心文にサイドラインを引く。 ・まとまりごとに短くした中心文を「要点」ということを知る。 ・それぞれの引いたサイドラインの文とその理由を発表し、①のまとまりが問題提示の段落であることを確かめ、文にまとめる。 ・②③のまとまりを短い文にまとめる。 ・④のまとまりの二文から大事	◎要点のまとめ方を知る。 ○段落ごとに中心文があり、それを短くまとめたものが要点であることを理解する。 ○指示語や接続語の働きが分かる	・一字下がっているところにまとまり番号①～⑥をつけさせ、その一字下がっているまとまりというのは、意味のまとまりであることを知らせる。 ・題名になっている「すみかえ」という言葉に着目させる。 ・学習の手引き①（中心文を見つけるためのヒント）をもとに、中心文の意味や、まとまりごとのごとの中心文の見つけ方を知らせる。 ・第二・三・四文に「すみかえ」という言葉が使ってあり、子供としては、初めて知ったことに内容である二・三文に着目する子もいることが考えられるが、文章全体を考え、問題提示文である第四文が適していることを理解させる。 ・要点まとめは、指示語、文末表現、つなぎ言葉などに着目させて、まとまりごとのつながりに目を向けさせる。 ・学習の手引き②(要点まとめカード)の使い方を知らせる。 ・ヤドカリが実際していることより、まとめて書いてあるほうが要点としてとらえるにはよいこ	【理解の能力】 ①～④のまとまりの要点をまとめることができる。

以下　同様の形式で学習指導展開の計画を立てる……（省略）

10　本時の指導　(9/14時間目)

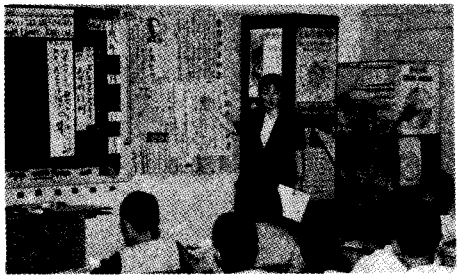
(1)**ねらい**　ウイルソンの研究とその考察について読み取り、要点をまとめることができる。

(2)**授業仮説**

①キーワードや指示語・接続語に注意して読むことによって段落ごとの要点がわかり、内容を一層正確に理解することができるであろう。　**(基本的・基本的事項)**

②「学習の手引き」の利用を通して、説明文の学習の仕方が分かるであろう。　**(学び方→主体的学習)**

③形成的評価や自己評価カードをもとに子供の実態を把握し、机間指導などによって、個に応じた指導ができるであろう。　**(個に応じた指導)**

過　程	学　習　活　動	基礎的・基本的事項	学習状況の支援・指導上の留意点 (個に応じた指導・学習材・学習形態)	評価の観点 (手だて)
はじめ めあての 確　認	1．前時の学習について話し合う。 2．本時のめあてや学習課題を確認する。	・前時の要点が分かる。 ・めあてや課題をしっかりつかむことができる。	※前時の要点カードで確認する。(一斉) ・学習課題カード ※課題のキーワードを意識させる。(一斉) 	・今日のめあてが分かったか。 (観察) (挙手)
読　む	3．学習範囲を確認し、⑥⑦⑧のまとまりを読む。 	・重要語句を意識しながら読むことができる。	※指名読みさせる。指名者についてはチェックしておく。(2～3人) ※声の大きさや速さに気をつけて音読させる。(個別) ※形式段落を意識させ、聞き手は重要語句に気をつけさせ、サイドラインを引きながら聞くように指示する。(個別)	・学習範囲が分かったか。 (観察)
考える	4．ウイルソンの研究について詳しく読み取る。 (1)学習の手引きをもとに、一人学びの学習内容を確認する。	・叙述に即して内容を正しく読み取ることができる。	※既習事項の確認をする。学習の手引き①②(一斉)	【理解の能力】 ・ウイルソンの研究で分かったことを読み取ることができる。 (ワークシート)

	・「それは」の「それ」が指しているものは何か。 ・「特別のえき」とはどんなえきか。 ・「道しるべになるもの」とは何か。 	・指示語や接続語の働きが分かる。 ・重要語句をおさえることができる。	※学習の手引きの使い方やワークシートの記入の仕方がわかっているか確認しながら机間指導を行い、助言する。（個別） 	
深める	(2)グループで話し合い、要点をまとめる。 	◎段落の要点をおさえ、まとめることができる。	・短冊カード・マジック ※グループで話し合ってまとめた要点を短冊カードに書かせる。（グループ・個別） ※話し合いに参加できない子には、机間指導をする。（個別） ※早くできた子へは、黙読や、内容を絵に表しても良いことを指示する。（個別）	【関・意・態】 ・グループで協力し、進んで要点をまとめようとする。 （作業への取り組み方） （観察） （発表）
練り合う	5．グループでまとめた要点を発表し、話し合う。		※学習の手引きをもとに、段落の要点が正しくまとめられているか確かめあう。（一斉）	
まとめる	6．⑥⑦⑧の要点をまとめ、ワークシートに記入する。	・要点をワークシートに書くことができる。	※ワークシートの一覧表に記入させる。（個別）	【理解の能力】 ・⑥～⑧のまとまりの要点をまとめることができる。 （ワークシート）
終わり	7．次時のめあてを確かめる。		※次時への意欲づけと学習の進め方をつかませる。（一斉）	
事後指導 評 価	8．自己評価カードを記入する。	・自分なりの感想をもつことができる。	・本時内に、時間があれば自己評価カードの記入をして発表し、相互評価させることによって学習の成就感を味わわせるようにする。	・学習に対して、自分なりの感想をまとめることができる。

11　授業実践を終えて

- 学習課題を設定し、問題解決的な学習を展開することで子供の学習意欲が持続し、基礎・基本に沿った授業を展開することができた。
- 言語事項については、指示語や接続語の働きについて理解を深めることにより、段落相互の関係や文章構成について意識するようになり、書き手の論理展開の表現の仕方に気付く子がでてきた。
- ワークシートやフラッシュカード等書く活動を取り入れることにより、文章を叙述に即して読み取ろうとする態度や、思考をはたらかせて自力で読み取った要点を共同思考の場で評価し練り合う態度が見られるようになった。また、ワークシートに、読み取ったことや分かったことを絵や図で表すコーナーを設けることにより、子供が意欲的に楽しく取り組んでいた。
- 読み取ったことからそのことへの感想を書いたりすることにより、知的感動を深めたり広げたりして、もっと知りたいという意欲をもたせ、読書へと発展的な読みができるような指導過程を工夫したい。
- 学習内容や子供の思考の過程が見えるような、板書の工夫をする必要がある。
- 自己評価や相互評価をする場面を大事に扱い、学習過程に位置付けて時間の確保を図りたい。

12. 評価の実際

(1)本時の評価補助簿

（9／14時間目）・学習内容［ありの行列・ウイルソンの研究とその考察について読み取り、要点をまとめる］

評価の観点		国語への関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語についての知識・理解・技能
評価の基準		・グループで協力し、進んで要点をまとめようとする。		・ウイルソンの研究で分かったことを読み取ることができる。 ・⑥～⑧のまとまりの要点をまとめることができる。	
評価場面		作業への取り組み方 観察・発表		ワークシート	
評価判定基準	A	自分の考えや一人学びでまとめた要点を、意欲的にグループに伝え、協力的に段落の要点をまとめようとしている。		学習の手引きをもとに、中心文を見つけ、ワークシートに自力で要点をまとめることができる。	
	B	グループの話し合いに参加し、協力的に段落の要点をまとめようとしている。		学習の手引きをもとに、中心文を見つけサイドラインを引いて、ワークシートに抜き書きすることができる。	
	C	グループの話し合いに参加せず、協力して段落の要点をまとめることができない。		段落の中心文を見つけられず、ワークシートに要点をまとめることができない。	
1		A		A	
2		B		B	
3		A		A	
4		B		B	
5		A		A	
6		A		A	

以下　同様に評価を行う……（省略）

(2)　第３学年　説明的文章の学習における評価補助簿

《第３学年　説明文教材》

①単元名「まとまりを考えて」　教材名『ヤドカリのすみかえ』『ありの行列』
②　〃　「くらべて考える」　　〃　『たこたこあがれ』『しょうたいじょう作り』
③　〃　「自然のふしぎ」　　〃　『虫のゆりかご』
④　〃　「たしかめながら」　　〃　『あなたはだれ』

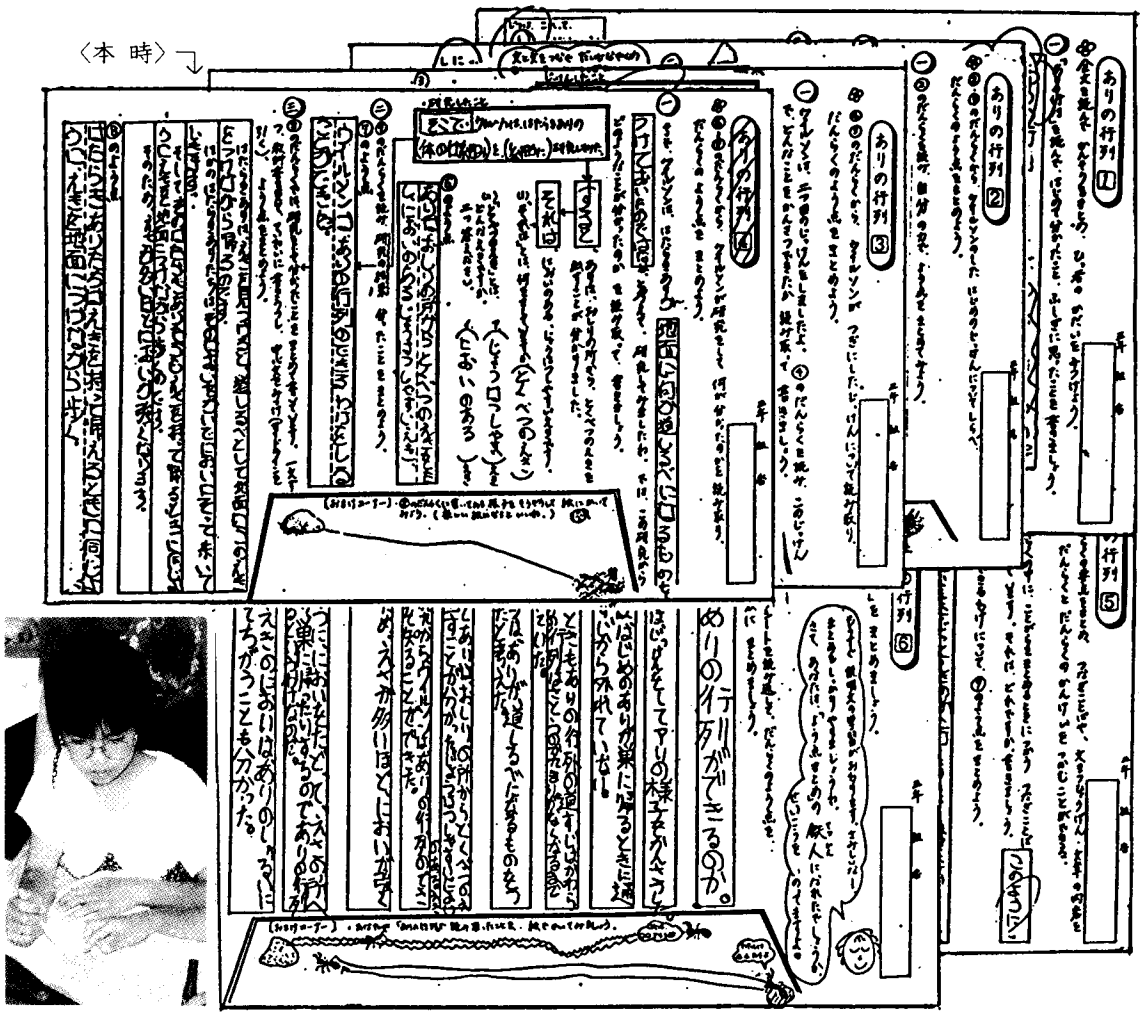
観点		基礎的・基本的事項	単元	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
国語への関心・意欲・態度		進んで発表をする。	① ② ③ ④	A	A	A	B	A	A	B	B	A	B	B	B	B	B	B
		進んで文章を書く。（読書ノート・作文・日記）	① ② ③ ④	B	B	A	B	A	A	B	B	A	C	B	A	B	B	B
		進んで本読みをする。（本読みカード）	① ② ③ ④	A	A	B	B	A	A	B	B	A	B	B	A	B	B	B
		いろいろな読み物を進んで読もうとする。	① ② ③ ④	A	A	B	B	A	A	B	B	A	B	B	A	B	B	B
表現		ウ 文章に書く必要のある事柄を選び整理してから書くこと。																
		エ 事柄ごとの区切りや中心を考えてから文章を書く。	①	B	B	A	B	A	A	B	B	A	B	A	A	B	B	C
		オ 事柄と事柄との続き方を考えながら、語と語や文と文との続き方に注意して文章を書くこと。	①	B	B	B	B	B	A	B	B	A	C	B	A	C	B	C
		カ 書こうとするものをよく観察してから書くこと。																
理解		イ 話の要点を聞き取り、自分の立場からまとめてみること。																
		エ 文章の要点を正しく理解しながら、内容を読み取ること。	①	A	B	A	B	A	A	B	B	A	C	B	A	B	B	C
		オ 文章の叙述に即して内容を正しく読み取ること。	①	A	B	A	B	A	A	B	B	A	C	A	A	B	C	C
		キ 聞いたり読んだりした内容について、感想をまとめたり、自分ならどうするかなどについて考えたりすること。																
		ク 自分の立場から大事だと思うことを落とさないで文章を読むこと。	①	A	B	A	B	A	A	A	B	A	C	B	A	B	B	C
言語	イ	(ア)片仮名で書く語の種類を知り、文や文章の中で適切に使うこと。																
		(ウ)学習した漢字を文章の中で適切に使うようにすること。																
	エ	(ア)人の活動や社会の事象などを表す語句を増し、その使い方の範囲を広げること。																
		(イ)語句には性質や役割の上で類別があることに気付くこと。																
	オ	(ア)文の中における主語と述語との関係及び修飾と被修飾との関係を理解すること。	①	A	B	A	A	A	A	B	B	A	C	A	A	B	A	C
		(イ)文や文章の中における指示語や接続語の役割と使い方に注意すること。	①	A	B	A	B	A	A	B	A	A	C	B	A	B	B	C

以下　同様に個別評価をする……（省略）

（A）十分満足できる　　（B）おおむね満足できる　　（C）努力を要する

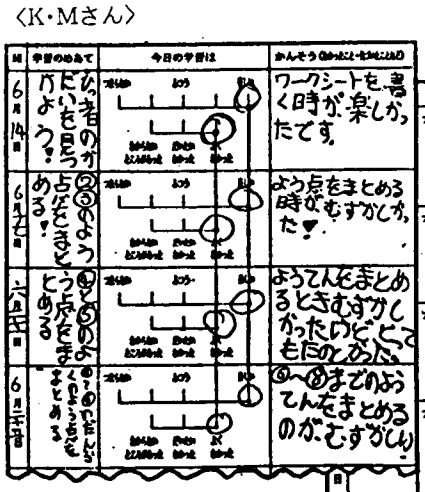
13. 資料

(1)単元で使用した子供のワークシート

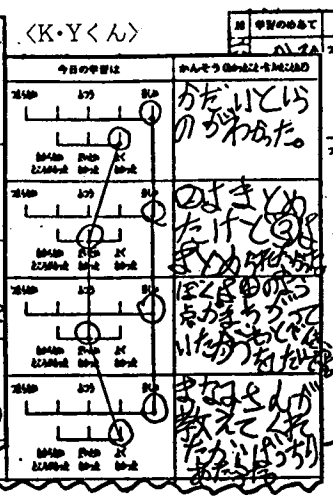


(2)自己評価カード

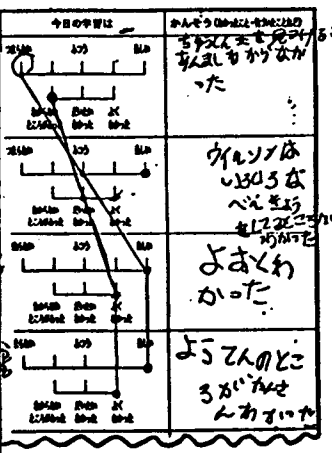
〈K・Mさん〉



〈K・Yくん〉



〈Y・Mくん〉



Ⅵ　研究の成果と今後の課題

国語科における説明的文章の指導を通して、「子供一人一人のよさを生かす学習指導と評価の工夫」について研究を進めてきた。本研究にあたり、子供一人一人のよさを生かす学習指導を展開するためには、まず教師が子供の実態をしっかり把握することが何よりも重要であり、指導の出発点となることを再認識させられた。単元における授業実践の全体を振り返り、以下に、研究の成果と課題についてまとめる。

1　研究の成果

- 子供一人一人が課題意識をもち、その課題を自力で解決しみんなと話し合う学習過程を工夫したことで、学び方を理解し、子供主体の授業が進められるようになってきた。
- 書き手の課題は何か、それを支える事柄は何かを明らかにし、文章表現や重要語句、指示語・接続語などを分析して教材を構造的にとらえることにより、何を、どこで、どう学ばせるか（基礎的・基本的事項）を学習指導の過程にしっかりと位置付けることができた。
- 一人学び・グループ学習・全体での話し合いなど学習形態を工夫することによって、子供が意欲的に課題解決に取り組み、協力的に作業学習を進める態度が見られるようになった。
- 学習の手引きを活用し、ワークシートによる一人学びを通して、要点まとめの要領をつかみ、叙述に即して内容を正しく読み取る説明的文章の学習の仕方が定着してきた。
- 毎時のめあてにそった自己評価をすることで、子供たちは本時の学習をもう一度振り返って反省し、次時の目標を明確にもつことができた。
- 単元における毎時の観点別評価補助簿を作成し、学習状況を形成的に評価することによって、個々の子供の実態をしっかりと把握することができた。それをもとに、一人一人の子供により細かな声かけやアドバイスができ、個に応じて見通しをもった指導・支援を心がけることができた。

2　今後の課題

(1)　個人差のある子供の学習活動を支援する個に応じた指導
(2)　効果的なグループ学習の工夫や一斉授業での個の生かし方
(3)　自己評価や相互評価をより活性化させるための手だてと工夫
(4)　観点別学習状況評価による評価判定基準表の作成

※　終わりに

新しい学力観に基づく授業の創造と改善を目指し、研究テーマに沿って半年間の研修に望んだが、多くの資料・文献等を通して理論を深め授業実践を行う等、とても有意義な時間を過ごすことができた。ささやかではあるが、授業実践において子供の変容を見る事ができたことは、何よりも嬉しいことであった。今後とも、教師の手だてがあってこそ子供一人一人のよさや可能性が生かされることを心に刻み、より質の高い授業、わかる楽しい授業の実践を求めて常に自分を反省し、指導方法を工夫して課題解決に取り組みたい。そして、得るものの大きかった今回の研修を糧として、実践・研究を積み上げ更に発展させることができるよう努力していきたい。

最後になりましたが、本研究を進めるにあたり、資料提供や温かいご指導、助言をいただきました中頭教育事務所の新城トシエ先生、当研究所の宮城清信先生、普天間小学校の嘉手苅喜郎校長先生をはじめ、励ましの言葉を下さった多くの先生方に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

〈主な引用・参考文献〉

文部省　「新しい学力観に立つ国語科の学習指導の創造」　東洋館出版社　1993年
文部省　「新しい学力観に立つ国語科の授業の工夫」　東洋館出版社　1995年
小森茂　編著　「新しい学力観に立つ国語科の学習指導と評価」　明治図書　1993年
石田佐久馬　編「新しい学力観に立つ説明文の授業 －その成功と失敗－〈1・2・3年〉」　東洋館出版社　1995年
高岡浩二・西野範夫 編「小学校 新しい学力観に立つ授業と評価の手引き」明治図書　1995年
沖縄市立 越来小学校「研究集録　自ら学ぶ力を育てる授業の工夫」　1995年